

野間 宏集

野間 宏集

新文學全集

河出書房

新文學全集 第四回配本

昭和二十七年十月二十日 初版印刷
昭和二十七年十月二十五日 初版發行

定價 一三〇圓
地方賣價 二四〇圓

著者 野間 宏

發行者 河出 孝雄

印刷者 永井 直保
東京都中央區入船町二ノ三

野間宏集

發行所 東京都千代田區
神田小川町三ノ八 株式會社 河出書房

電話神田(25)三一七四番

永井印刷・加藤製本

目次

暗い絵

三

顔の中の赤い月

五

残像

六

崩解感覚

七

第三十六号

一六

地獄篇第二十八歌

一七

夜の脱柵

一七

風と炎

二五

雪の下の声が……

二六

あとがき

二七

年譜

二八

装幀 脇田 和

野
間
宏
集

暗い絵

生えている。そして長い頸と足をもつた醜い首吊人がひよる高い木の枝にぶらさがり、長く伸びた爪先がひらひら地の上に揺れている。その傍には、同じように背の高い体の透いて骨の見える人々が長い列をつくつて、首を吊ろうと自分の順番を待つている。痙攣した神経をあらわに見せる襦袢着の汚れた頭のように、何か腐敗した匂いを放つて揺れているくさむら。

草もなく木もなく実りもなく吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぎる。はるか高い丘のあたりは雲にかくれた黒い日に焦げ、暗く輝く地平線をつけた大地のところどころに黒い漏斗形の穴がぼつりぼつりと開いている。その穴の口のあたりは生命の過度に充ちた唇のような光沢を放ちうずたかい土饅頭の真中に開いているその穴が、繰り返される、鈍重で淫らな触感を待ち受けて、まるで軟体動物に属する生きもののように幾つも大地に口を開けている。そこには股のない、性器ばかりの不思議な女の体が幾重にも埋め込まれていると思える。どういうわけでブリュゲルの絵には、大地にこのような悩みと痛みと疼きを感じ、その悩みと痛みと疼きによつてのみ生存を主張しているかのような黒い円い穴が開いているのであろうか。遠景の、羞恥心のない女の背のようなくぼみのある丘には、破れて垂れさが

る傘をもつた背の高い毒草のような首吊台がよきによき

遠くの黒い地平線と交叉して立ちならぶ、木の葉一つない枯木のような首吊台。その中の一番高い裸の手を上げたような一つの首吊台を眼がけて、飛び集つて来る声のない黒い鳥の群、鳥達はこの地平線を越えて、この大地の上に姿を現わした時、あの醜い暖れた声さえ失つてしまつたのかと思われる。その先頭の一片の鳥は部厚い羽を不恰好に折りたたみながら、何か深い悲しみに捉えられて頭を垂れている。そしてひよる長い首吊台の上に足を揃えて身を停めようとしている。絵のほとんど中央には、磔刑にされたキリストの体が、半ば膝をつくように十字架の下に横わっている。このキリストは、何の苦しみの表情も何の悲しみの表情もなく、むしろ無表情の薄つぺらい顔貌を持ち、それを取りかこむ人々の群が黒々と画面を取りまいている。

またこちらには、爬虫類のような尾をつけた人間が股をひろげて腰を下し尖つた口の中から汚れた唾液をはきかけている。その股のあいだには、やはりあの大地に開いていると同じ漏斗形の穴がぼかりと開いていて、その性器が、性

器の言葉があるとすれば、その言葉でしやべつていように思える。そのすぐ後には四つばいになつた獣が、何か不潔な傷のためにいまにもちぎれそうになつた尻尾を、地面に引きずりながら、こちらを向けた顔だけは人間の形をして、苦しい嘆息の呼吸をつづけている。

蛙の水かきの皮を五本の指の間にもつた人間、ひとでのように幾本もの足を体中にはやしている人間、人間の足をつけて歩いている魚、それらがそここに匍匐^{はづ}うている。これらの人間はまるで性器以外には何等の営みの機關をもちえないかのようなものである。そしてその部分で食い、その部分で笑い、その部分でなげくのである。匍匐^{はづ}うているこれらの尾のある人々の傍に、低い木の切り株が切り口から細い幾多の枝をさしのべ、舌を出し、それは焦がされた欲望と腐敗した肉体の匂いを放っている。ひとの股の形をした枝やもつれ合う毛や、嘲笑する機關がその切り株の後のまばらなくさむらの中にちらついている。そのくさむらの前にやはり尾のある人間が、足を開けて坐り、何か自分の受ける苦しみがあまりにも大きすぎたというよりも自分の生活には苦しみ以外にないので、自分の生活を苦しみという言葉で表情する術さえ知らぬ無表情なそげた顔をして、自分の股の間にあいているあの暗い穴をじつと見つめている、暗い少しの華やかささえないあらわに淫蕩な眼が、これらの風景を何処からか見つめている。それは淫蕩などではない。押しつぶされた生命がただどこか最後の一

局部で生きている、こうした暗い不潔な醜い部分にのみ生きていゝのをその不潔な部分が羞恥しているのである。否、それは羞恥でもない。それは羞恥のような高貴な感情ではない。たしかにこの尾を持った匍匐^{はづ}うている人間の何処にこうした高い感情があるなどと云えるであろうか。あるいはまたそうした感情をあゝの尾のある肉体の何処の場所で見現するのであるか。この醜い大地にほつきり開いている穴は、ようやく人類のルネサンスを迎えようとする歴史の中で、ズタズタに切り刻まれたアミューバーがなおも生きつづけるようにようやく生れはじめ発生しつつあつた個人、個体の跡形だといふのであるか。たしかにその黒い穴は何かを愁訴している。何かを訴えたげにしている。自己の存在をこうした醜い形の中にも示そうとしている。あの尾のある匍匐^{はづ}うている人間が、何か奇妙な魂のように股の間に大事につけているこの穴。たといキリストの磔刑^{はりつけ}の姿の中にうがたれていてさえ不思議には思へぬ黒い輝きのようにうがたれ、開き、蠢動^{うごめく}しているこの穴、また、其処には頸の短い乞食がいる。足の曲つた氣狂いがいる。冷酷な賦役、重い岩のようのにしかかる農奴制の下に背中のまがつた農夫がいる。農夫はやせて、寒そうに汚いぶくぶくの上衣に身を防いでいる。盲人がいる。乞食は大きな二股に開いた木の足をつけ、松葉杖にかわる短い棒をついている。乞食の背中には太い狐の尻尾が何本も縫いつけられて、歩くたびにそれが揺れる。それは揺れながら滑稽にひ

らひらする。これが食の笑いなのである。当時の支配者スペイン王フィリップ二世の専制政治に対する嘲笑なのである。其処には人間への嘆きがある。そして人間の不正や、恐しい几屑や、不公平に対する戦いがある。憐愍がある。さらに高い愛がある。これらの化物を支えている精神の中には人間の矮小な姿の中に閉じこめられて燃えている深い愛があり、貧困に対する痛烈な憤怒がある。無智と愚昧と冷酷に対する反抗がある。そしてそれらが苦悩の上に強い姿となつて、烈しい形をとつて、姿を現わしている。そして、此処には群衆への、集団への、民衆への強い執着がある。人々は集団以外としては現われない。祭の夜の、風景

の中の点描としての、むれた蛙のような人間の集りとしての、髑髏をつけた人間共の群としての、犬をつれた獵人がかえつてゆく農村の営みの中の人々の群としての、集団以外としてはあらわれない。そして、ここには民衆の最後の武器である笑いと諷刺があるのである。

これはフランドルの画家、百姓ブリュゲルの絵画集から深見進介の得た印象——奇妙な、正當さを缺いた、絶望的な快樂に伴うごとき印象、そしてまた、そうした暗い快樂の深い穴の中で無益にうめきもがいているとも云えるような印象の集りである。真白のフランス綴の部厚い菊判大の絵画集。これを深見進介に貸し与えた友、また彼と共にこれを繰り返し眺めた友は、ほとんどすべて若くして獄死しなければならぬという生涯をたどつたのである。そ

してこの画集もまた数知れぬ白い輝きを連ねて夜空を押し渡り襲うて来るB29の重い翼の嵐の下に、はね上る油玉と共に燃え、ただ曲りくねつた鉛のガス管や、紫色に焦けてゆがんだ裸の鉄骨や熔けて薄緑に固まつたガラスの塊りなどの間に、形もない灰となつて残つたのである。この写真版の絵画集が、油脂罐夷弾の飛び火を浴びて、綴り合わされた絵の一枚一枚が、流れる黒い液体のような炎の中に焦けてはがれながら燃えていつた時、この絵の中のひとりのような人間、犬の顔をつけた人間、尾をつけた裸の人間、あの暗い爛れたような穴を大事そうに股の間にもつている人間達が大きな如何なる力をもつてもとどめえない火災のあついほてりの中で、すでに紙の下に廻つた小さい炎のために次々と火あぶりにされ、その汚い獣な正視し得ぬような肉体を焦がし、醜い体を火のためにさらに醜くけいれんさせるかのように歪めて、しばらくは燃えてゆく紙の火の中に明かな形で姿を現わし、焦げる紙の上にあぶり出しの字のように黒々と線をつけ、そしてやがてそれらの体も火となつて消えていつた時、大阪全市は南の空から北の空へかけて、燃える炎であかあかと明らみ、急速な生命の危険をつたえる重い脅かすような響きをひろげながら、空を押し渡る機械の嵐が、幾千という巨大な鈍い光をたたえた重い翼の幾重もの重なりが、炎の明るみの中に次第に大きな大阪市の全景をくつきり表わしてくる街の上にもうもうとこめた火炎を越えて過ぎ渡つてゆき、この空の中を押

し移つてゆく、限りないモートルと大きな機械の重みに押しひしがれながら消えてゆく、奇怪な穴をもつた人間共のうめきが、何処かその炎の中から聞えたかも知れないのである。このとき、この画集の置かれていた工場の寄宿舎の居室が焼けてゆくのをしながら、深見進介の心はいよいよ暗く、防空頭巾と鉄帽の下彼の顔は、大きな戦争が彼の生命から呼び出した生き生きとした生命の緊張のために輝いてはいたが、さらにいつそう暗かつた。その時、ある軍需工場の一部門の責任者の位置にあつた彼は特設防護団のいかめしい服装を着けて、この画集の置かれている部屋に移つてゆく炎を地面に立てた長い意口に寄りかかるようにして、苦しげに眺めていたが、すぐ消火作業のために団員を指揮する位置に走り去りながら、そのひとでのような足をもつた人間達が、暗い闇の中で燃え上り焼け焦げるのを思うと、彼の心の中を何か震えおのくような感情が走り、彼の顔は鉄帽の下で、ちやうどその絵の中の人間の焼け爛れてゆくときの苦しげな表情を、赤々と燃える火に映えて示したのである。

この画集に眼を止めたものはあまり多くはいないと云える。というのは、深見進介はこの絵画集を大事にしてい、あまり親しくないものには決して見せることはなかつたから。あるいはまたこの画集の意味を解こうと努力するもの、また少くともこの絵画集の荷なう暗い感情に意義を認めるものは、あまり多くはいないに違いないと思つたから

でもあつたが、まずこの画集を彼に貸し与えた永杉英作、その友羽山純一、その友木山省吾、其の他二、三のものがこの画集を眺めたことがあるだけであると云える。彼は始終この画集を手元に置いてはいたが、学校生活を了え社会に出るようになってからは、かたくなに誰一人としてこの画集を見せようと思う人間には出会わなかつたのであつた。学生時代の友、永杉英作、羽山純一、木山省吾、これらの人々は彼が京都の大学に在学中、共に学び、共に闘ひ、共に苦しみ、時には共に放蕩し、また、共に意義なく時間を過した人々であつた。支那事變の勃発の前後にわたる彼等の青年の時代、それは青年の強烈な精神が日々に光を放ち、ことごとに激越な調子の表われる、排他的な口論と嘲笑と自己嫌惡と傲慢との奇妙に混合した三年間であつた。友人達は若くすべて偏狹であつたが、その偏狹によつて皆は、美しい精神を保持し、互いに切磋した。世の中にあつては正に何億の金に見つてもつても買えないあの純真を惜しげもなく使い果し、不思議な表現ではあるが本能的な誠実の衝動が現われると、如何なる障害も止めえず、如何なる恐怖も阻止しえぬ生命の自由の羽ばたきが、人々の額を輝かせていた。これらの友は何れも、青年時代のこの生活を何時までも持続しようとしたため、戦争が進行するにつれて、あるいは民間の刑務所につなされ、あるいは第一線から飛行機で内地に送られ軍の監獄に収容せられたのである。しかし、これらの人々の眼も、それほどしばしばこの画集に

注がれたとは云えないのである。というのは、この画集を見るのは、あまり楽しいものではなかつたから。むしろこの絵の集りは、見る人々の各自の置かれてゐる社会的な位置、その家族の關係、各人の女との交渉、各自の思想等の暗さをそれぞれ各自にあまりにも強く思い起させたから。

深見進介が初めこの画集を見つけたのは永杉英作のアパートの一室であつた。それはその部屋の右隅の大きな白木の本棚の一番下の段の右端に置いてあり、いつも緑地の蔽い幕の端からはみ出て、その部屋に入る度にその純白の部厚い大きな画集の背が彼の眼を射るのである。形が大きく本棚の上の段には入らないので、永杉英作は茶碗や食器類を置くのに使つてゐる本棚の下端の一番右隅に置いていたのである。深見進介はときにひとりで、その本棚からその重みのある画集を取り出し、また時に共に頁を繰り、時に共にその絵について語り合つたのである。その画集の中の暗い、嘆きのような、痛み、うめき、うずいている人々の多くの姿は、彼にあらわに、彼自身の苦しみを感じ起させ、彼はそれらの絵を見まいと思ひながら、しかしやはりその絵のもつ何か不可思議な力にひかれてその頁を繰るようになるのである。しかしこのブリューゲルの絵が特に彼に強くせまり、彼の心に強い力の反射のように照りつけて来たのは或る夜のことである。

当時彼は全く切りつめた生活をし、彼の不幸な恋愛はほとんど破綻に近づいてゐた。そして彼の幾分長形の顔はそ

の感情が激越に調子づいてくると、何かの拍子でほんの一瞬间救われたように頬のあたりが少し美しく見え、くぼみの深い眼窩に溢れる涙でしばしば洗われるという状態であつた。こうした熱い涙が顔をぬらす時、彼は肘や尻の部のすりきれて光つてゐる黒サージのみすぼらしい学生服姿の自分を忘れ去つたが、その涙の訪れぬ不断の時期には自己に對する過信と絶望、謙虚と傲慢、野心と敬虔とに交互に見舞われ、烈しい活力から烈しい疲労に移り変る時を過すのである。そしてそれらの根柢に、自分自身に對する不満と社会制度に對する憎悪があつた。その日も深見進介は朝から何時ものように焦躁を感じ自分のそうした感情を制御しながらも幾分いらいらしてゐた。青年によく見られる自分の周囲のものがすべて自分に敵對してゐるような感情が彼を襲つてゐた。

大阪府庁に席を置き、何時までも小官吏の地位にゐる父がその朝手紙を寄越し、この月は母親が病氣のため思わぬ費用が要り、節約第一にして欲しいと云つて来たのである。読書費は今月はなしに済ませて欲しいと云い、最後にこれは手紙の度毎に父の書く文句であつたが、思想問題に注意して日頃の賢明を以て徒らに徒覚に与せぬ方針を堅持されたしと結んであつた。深見進介は居近くその為替を封入した書留郵便を受取つた。そしてその手紙をよこした父に腹を立てた。しかし彼は自分のその怒りの中から金錢の圧力が、彼の身をしめつけて来るのを感じた。それは或る

意味で哀れな醜い自由を失つた感情であり、彼は自分のその感情の後に、汚れた光を放つてゐるような父の姿を見出し、それをじつと見つめるようにした。父の姿が浮んでくる。それはその金銭の圧力感の中から形をとり、現われてくるのである。それは金に押し潰された種族の顔である。

優しい心の働きを金に奪い取られたもののもつ顔である。金の中の老衰の表情である。左にゆがんだ長い鼻隆、險の肉の薄い眼、短い肩。この眼は遠くを見ない。人々の顔の中で何を読み取ろうとするのか、しばしば小さく動く。しかも哀れに小さく動く。茶色に近い瘦せた頬、それは卑屈に属し、硬化した咽喉のあたりの皮膚、これは労苦に属している。そしてこれら父の表情を縛つてゐるのは金銭である。

深見進介はいわばその父親の顔を心の中に抱きながら、その日一日を過したのである。学校の講義に出たがそれは型通りに終り、すぐ宿に帰り、ドイツ語の勉強を始めたがはかどらず、一日を無為にすごすという思いが、彼の心を堪え難いものにした。そして夕暮の気配が部屋の窓や机の上の書物に影をつけ始めると、深い悲しみというような一種の落ちつきさえもない、価値などに全く関係のない焦躁に貫かれて、何時ものように永杉英作のアパートに足を向けた。しかし深見進介は永杉英作のアパートに着くまでに食堂に立寄り其処で再び金の問題に出会い、そしてさらに、その当時の思想運動と呼ばれる小さな哀れな動きに出会わ

なければならなかつた。街の金貸しと街の思想運動家達が彼の途中に待つていたのである。そしてそれは金貸しと思想運動家と、こういう風に二つを並べて書いても少しも不思議ではない程どちらも哀れな汚れた存在であつた。

二

既に日の暮れた神社の境内の曲りくねつた坂道を下り切ると、小さい暗い煙るような冷い暈をつけた電燈が電柱の高いところにあつて、十字路になつた少し広い道をぼんやり照している。その角の山際に沿うた二階建の屋並の三軒目の表口の硝子戸が明々と光を道に投げている。深見進介は硝子戸を開け、意外に明るい食堂の土間に入つて行つた。安物の白塗料を用いてある部屋の新しい四囲の壁には白い電燈の光が照り返つてゐる。店の間には左隅のテーブルの角の所で高等学校の学生が、空になつた食器膳の上に夕刊を拡げてテーブルに乗りかかるようにして読み入つてゐる他、客は誰もいない。妙に時刻はずれの空気が部屋を充たしている。厚い松材に少しそり返つて罅割れた六尺テーブルの上に、粗末な長い竹箸を入れた竹筒の脊の高い箸立や、白い安物の湯飲み茶碗をふせた、木のくり抜き盆、アルミの大きい湯沸しが冷い影をつけてゐる。この食堂に足を入れた時、深見進介の中背よりは少し大きい身体をつつんだ垢じみた学生服の姿は、光の中にぱつと浮び出、一歩敷居をまたいで店の奥の方を窺つてゐる顔は電燈の光り

で不断よりは陰影の深い形を見せ、長い眉根やこめかみ、上方の辺りの曇つた暗い表情の中に、若いもの達の顔に表われる、あの自意識と対人意識の皮膚の緊張が走るように思えた。

「いらつしやい。」親父の声が太く響いた。深見進介はテーブルの横を廻り、顔をふせるようにしながら、真直にその声の方に寄つて行つた。台所口につづいた中の三畳の間の仕切りの暖簾の間から大きな鼻と大きな耳をつけた大柄の親父の顔が、客の姿をじつと見定めるように覗いている。それはまるでその親父の大きな鼻だけが、其処から覗いているというように思える。《鼻奴、鼻奴、深見進介は何故ということもなく心の奥でこう思つた。するとこの言葉と共に、その時まで彼の心の深みに沈んでいた一つの押しつけるような圧力があらわな、眼に見える力となつて現われ、彼の行手をさえぎるかのようになつた。それはあらたに姿をもつて現われた金の圧力であつた。深見進介の足は一瞬土間の真中で止つた。彼は彼の心の片隅に自分の父親の顔を思い浮べた。あの短い半白の眉の中の弱い、伏せがちの父の視線が浮んで来た。「徒らに徒党にくみせざる方針を堅持されたし。」この父の言葉が彼の頭の中をちらと走り過ぎた。しかし彼は頭を左右に振つてこれらの言葉や姿を自分の心から振り落すようにしながら、親父の方に近寄つて行つた。奥の間の騒ぎが聞えて来た。深見進介はそれに気づいた。そして彼は何故か自分の姿を隠そうという

氣持に襲われた。それは彼の同級生の小泉清達の集りであつた。店の間につづいている、少し暗い電燈の六畳の間で将棋盤を囲んで、何時ものように食後の時間を過しているのである。深見進介は言葉もかけずにその傍を抜けるような氣持で黒と赤の染分けの暖簾の方に進んで行つた。そして暖簾を分けて上半身を斜めにしながら、胸から上を三畳の間の親父の大きな角火鉢の上に突き出すようにした。「今晚は。」深見進介は低い声で云つた。そしてまるでこの厭な親父の鼻の形を見るのが自分に課した罰でもあるかのようにじつと親父の顔を見つめた。

「やあ、いらつしやい。」親父は顔を上げた。が、彼の厚いふくれた右頬の上を狼狽の影が通り過ぎた。そして、次の瞬間訪問者の心を一撃の下に打ち挫くような堪え難い色が眼に表われ、顔全体にひろがつてゆくように思えた。

「やあ、いらつしやい。どうしたの。深見さん、今夜はえらく遅いじゃあないか。もうおでんの火、落してしまつたけれど、それでよけりやあ、お上んなさいよ。」親父の冷い顔の肌の下から笑いの表情が表われて来た。しかし深見進介は自分の心の底まで冷し込んでしまふような先刻の親父の顔を忘れることは出来なかつた。親父はたしかに彼がこの暖簾をくぐつてこの三畳の間に姿を現わすことを予期していなかつたのである。というのには親父は二重の眼をもつていたから。食堂経営の主人の眼と高利貸の親父の眼と。そして深見進介は彼の金融口座帳に名を載せている客では

なかつた。又そうした種類の客になる見込みのある客でもない。そうした金を借りに来る学生はもつと大まかな、もつと家庭のいい、「行き当たりばつたり」式の、親父の言葉で云えば、「その日の向き向きでことをやる人間」であつた。

「うん、ちよつとお願ひがあつて来たんだけど。でも先に食事を済ませうかな。」深見進介は笑いのもどつて来た親父の顔を見つめながら云つた。

「食べてくかね。火は落したんだけど、まだ冷えちやあいないだろうよ——まあ、上へお上りよ。」

「うん、食べるよ。せつかく寄つたんだから。」

「小泉さんや谷口さん。皆さん奥に来て、賑かだよ。お上りなさいな。」

「うん、上らせてもらうけど、何があるの。」

「なんにもないんだよ、生憎今日は。おでんだけなんだがね。」

「何でもいい。おでん貰おうか。けど、その前にちよつと親父さんに頼みがあるんだがね。」

「おでんだつてちつとも、冷えちやいないよ、いま火落して、俺も一休しようと腰を落着けたばかりだからね。」親父はわざと気づかぬ風をしている。親父の顔はすでに余裕のある柔和な笑いを取り返し、それで武装している。たしかにこの笑いは商売用の武装である。この笑いの後に半ば機械になつた彼の硬い心がある。長い失敗の人生の後でなお

頑強に人々に抵抗しようとしながら、身体に比して極めて小さい魂を金銭に握まれた男の心、金銭への執着がきしむような響をたてる機械の心があるのである。そして、この小さい金銭の機械は学生の下宿に乗り込んで、辞書や衣類や時計やその大事な持物を抵当物件として取り上げる時、極度の疲労から古ぼけた埃をかぶつた街工場のミールングのような音を立てることがある。しかしこうした疲労を伴う興奮がかえつて彼の背骨をしつかり内から支えて呉れるような感じが彼に少しの後悔も起させず、いつそう彼を駆り立てて彼の内の残り少ない「人間」を奪ひ去つてゆくのである。こういう一銭銅貨の色にも似た顔色をもつた男は日本の社会にはしばしば見られる。これは日本の社会の奥底にある造幣局で製造される多くの人間の一人に過ぎない。そして先刻深見進介がこの親父の鼻を見ながら彼の父の顔を思い出したというのも、彼の父とこの親父とが一方は金貸しであり、一方は借り手に廻る方でありながら、社会の同じ場所で製造された人間であることに変りはなく、彼等の顔には同じ銅貨の模様が打ち出されているからであるとも云えるのである。

「どうもこの間から体の調子が悪くてね。」深見進介はまづすぐに親父の鼻を見つめながら、わざと気づかぬ風をしている親父の心を感じ取り、話を持出すのを止めて云つた。

「風邪でも引いたんじゃないの。顔色がよくないね。」

「……………」

「深見さんも体は強い方じゃないね。頸の長いものは体は華奢だつて云うから。」

「……………」深見進介の心は次第に息苦しいものになつて来た。なぜこのような何の意味もない話をつづけなければならぬのか。何が故にこの親父に背を向けて出て行くことが出来ないのか。ただこの親父に食費の借りがあるというところが、これ程までに自分をここに縛りつけるのか。彼は同じように親父の渦巻いた太い眉や左上の電燈の光の中に浮き出た肉の高い左頬などを眼を据えるようにじつと見つめていた。

「夜ふかしが体には一番いけないんだよ……熱はあるの。」
「熱はないんだけど。この間からの寝不足が応えたのかなあ。肩が凝つてしようがない。」

深見進介は頸を左右に曲げて見せた。ポキポキという音が頸のあたりでする。

「そりやあひどい。そんな年でその肩凝らしじやどうする。でも氣をつけたがいいよ。この頃急に冷えてきたからね。」三方に白木の戸棚を据えた部屋真中で、親父の大きな体がじつと動かない。茶の繻子地の座蒲団を置き、薄瓶の太い毛糸編のちやんちやんこを羽織つた体が、磨きのかかつた角火鉢に膝を押しつけ、胡坐にして坐つてゐる。これが彼の人生との取引きの場所であり、ここで彼は生命ある人生と社会を小さい冷い金に換算しようというのである。

る。このとき彼の心は喜びにふくれ上る。学生達の抵抗力の弱い、柔い心の上に躍りかかるこの半機械の金勘定の喜びのきしりを深夜誰が聴くのであろうか。深見進介は心がうずくように思つた。

「この家なんか裏が山だもんだから、夜中に冷えること冷えること、三時か四時頃びーんと冷気の降りて来るのがはつきり眼に見えるようだね。」

「……………」

「京都は冬が早いからね……。」

「……………」

「わしは元来京都はすかんのだよ。」そして親父の顔に冷い皮膚の笑いが戻つて来た。

「……………」

「ところで、何の話だつたね、頼みたいつてのは。」親父は低い抑揚のない言葉で云つた。そして、これが親父の真実の心の言葉であり、鼻の語調なのである。

「うん。食費、随分放つて置いて済まないんだけど、今月は出来れば半分だけにして呉れないかなあ……。」深見進介はようやくにして胸の中のものを押し出すようにして云つた。

「そりやあいかんよ。」抑揚のない太い声の下で親父の顔は柔かい笑いの武装に満されている。そして、これは先程から彼の頭の中に用意されていた言葉であつた。「出来ればしてあげたいんだけど帳付けはやめにしてゐるんだよ。」

「……………」

「表通りの店で帳付でやつて、あまり気前よくやつたもんだから結局回收できなくつてね。」

「うちは、娘とも相談して貸しはよすことにしたんだよ。お互いに気まづくなるもただから。学生さんは自尊心が強いからね。」

「……………」

「どうしたつて、自然水臭くなつてゆくもどねえ……。」

「そうだろうね。」深見進介は静かに云つた。しかし彼の心は、深い痛みを放つていた。「そんなんならやつぱりちゃんと勘定して貰つた方がよいんだなあ。ほんとに迷惑をかけて落まなかつたよ。為替なんだけど、これで受取つてくれるかしら。」彼の心の深みでは羞恥が炎を放つていた。

彼は測りたい心の中で、彼の柔かい心が親父の心の冷い機械に挟まれたもののように、自分の心の中の暗い羞恥の感情を隠そうとしながら、落着いたゆつくりした調子で云つた。

「いいとも、いいとも。うちは小為替でもどうせ取換えりや一緒だよ。そりや御都合もおありだろうが、そう云うわけなんだからね。頂いておくよ。」

「……………」

「ええと、いくら頂くんだったかな。ちよつと調べて見ようかね。」

「……………」

「この頃は何かも値が張つてやり憎くつて仕様がなによ。市場へ仕出しに行つてもちよつと手が出せない仕末で、今日も手ぶらで引返しさ。……そうしたつて、定食の値段は上げたくないしね。」

「……………」

「学生さんだつてこの時節じゃあ、やり憎いのはよく解つてるし……。しかし学生さんは将来が身上さ……楽しみだよ。」

「将来がね。」深見進介はただ金銭に打ちのめされた心に落ち着きを取り返そうと努めながら云つた。「その将来の身上が就職難なんだから世話ないよ。親父さん。」

「そう云つたもんでもないよ。自然に先は開けてくるよ……ええと、ちようど四十六円二十銭になつてるから、三円八十銭のお釣りになるがね。じゃあ頂いとくよ。どうも……。」

「ほんとに落まなかつたね。」親父の笑いの下の厚い錆色の顔が深見進介の心をさえぎつていた。彼はまともにその顔の奥にある奇怪な一つの心につかつていた。それは彼の未知の心であり、若者の柔い芽のような心を押しつぶす測り難い心の在り処であつた。そして釣銭を握つた右手が親父の暖い手の平に触れた時、彼は自分の手が慄うように後しざりするのを感じた。

「いや片づけときや、どつちも気持がいいもんだよ。まあ奥に上つてゆつくりしておゆき……おい、千代子、深見さ